

2010/12/10

# エコキャンパスフォーラム 2010 企画実施報告書

エコ・リーグ(全国青年環境連盟)  
Campus Climate Challenge 実行委員会

全国青年環境連盟(エコ・リーグ) Campus Climate Challenge 実行委員会は、大学の温暖化対策を調査し、第2回エコ大学ランキングの結果を発表した。それに合わせてエコキャンパスフォーラム 2010 を開催した。当日は、関西地方や北海道など様々な地域から約70名の参加者が集まり、積極的に学内環境対策に取り組む大学の事例紹介やパネルディスカッションを聞いたり、ランキングの調査結果を基にしたワークショップに参加したりした。

場所	国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟第1ミーティングルーム
参加対象	(1)学生 (2)その他一般(大学教職員の方など)
定員	60名
費用	学生無料(学生以外の方1,000円)
主催	エコ・リーグ(全国青年環境連盟) Campus Climate Challenge 実行委員会

【協賛】このイベントは平成22年度地球環境基金の助成を受けて開催しました

## 0. 企画背景

エコ・リーグ Campus Climate Challenge (CCC) 実行委員会は、2009年から国内にある大学の学内環境対策の現状を調査・把握し、その実施状況から「エコ大学ランキング」を作成している。2010年も調査対象を国内にある全4年生大学(742校)に広げて調査を行い、11月4日に調査結果とランキングを発表した。

今回のランキング結果を受け、その結果を広く周知するとともに、先進的な対策事例(グッドプラクティス)を共有して広めることで、その他の多くの大学の環境対策が進むきっかけの創出を目的とした企画「エコキャンパスフォーラム 2010 ～キャンパスにおける気候変動対策の先進事例～」を開催するに至った。対策が進んでいる大学の多くが学生と教職員との連携が図られているという調査結果を基に、「学内での連携」をサブテーマとし、学内での環境対策に関心を持つ学生や、対策担当者を参加対象とした。

**エコキャンパスフォーラム 2010** ～キャンパスにおける気候変動対策の先進事例～  
日本、そして世界の先進事例がここに集まる!!

世界一の環境先進大学を目指す三重大、太陽光発電導入量日本一の日本工業大学。今年のエコ大学ランキングで上位となった2大学から関係者や学生、さらに米国版エコ大学ランキングでトップレベルの評価を得ているイェール大学から来賓の学生活動家が集まり、その活動成果をご紹介します。

タイムスケジュール	
	主催団体紹介
	第2回エコ大学ランキング結果概要
第1部 (14:00～15:45)	三重大の取り組みについて(井教授)
	日本工業大学の取り組みについて(成田教授)
	イェール大学の取り組みについて(ジミー氏)
第2部 (15:55～16:55)	パネルディスカッション ～学生の気候変動対策、何が出来るか?～
第3部 (17:10～18:30)	ワークショップ
懇親会 (19:00～21:00)	会場:D棟9階

- 観覧中に写真やビデオを撮影いたしますので、ご都合が悪い方はお近くのスタッフまでお知らせ下さい
- 途中で退場される方は、左手後方の扉から出入りをお願い致します
- お手洗いは会場を出てすぐ右手にございます
- 施設内は全て禁煙です
- 会場内は飲食ができません



★このイベントは平成22年度地球環境基金の助成を受けて開催します★

<当日配布した式次第>

## 1. 企画概要

### <企画基本情報>

企画名称	エコキャンパスフォーラム 2010 ～キャンパスにおける気候変動対策の先進事例～
日程	2010年11月20日(土)
時間	開場・受付:13:30 開始:14:00 終了:18:30

### <企画内容>

- ◆ 第1部 ゲストスピーカーによる講演
  - [1] 第2回エコ大学ランキング結果発表
    - ・ランキング結果について解説
    - ・ランキング上位大学による基調講演(三重大大学、日本工業大学)
  - [2] 米国大学生による活動紹介
    - 「イェール大における持続可能性に関する取り組みの特徴と成果」

発表者: James Murphy Jr.氏(イエール大学)

## ◆第2部 パネルディスカッション

テーマ:「学生の気候変動対策。何ができるか!？」

<パネリスト>

朴 恵淑 教授(三重大学環境 ISO 担当/学長補佐)

佐藤 杉弥准教授(日本工業大学)

坂本 卓司(大阪大学大学院修士1年)

小出 瑠(早稲田大学3年)

## ◆第3部 ワークショップ

アンケート調査回答例を基にした対策考案・提案ワークショップ



来場者で埋まった会場

## 2. 企画実施状況

### 2.1 参加者について

当日は、事前参加申込者 60 名と当日申込み者 11 名の合計 71 名が参加した。参加者の多くは大学生および大学院生で、その他にも大学関係者、メディア関係者が参加した。地域で見ると多くは関東からの参加者だが、北海道や大阪、京都など遠方からの来場者もいた。

【参加者数】71 名(運営スタッフ 15 名を除く)

### 2.2 第1部 <講演>

#### 2.2.1 第2回エコ大学ランキング結果解説

はじめに主催側から、11月4日に発表した第2回エコ大学ランキングの結果概要について発表した。今回の結果は複数のメディアに報道されたが、その内容だけでは分かりづらい点について補足しながら解説した。

【発表者】

永井健太郎

(CCC 実行委員会リサーチチームリーダー)

【発表内容】

1. エコ大学ランキングについて解説
  - ・調査、ランキングの目的
  - ・調査方法
  - ・回答大学数
2. 第2回エコ大学ランキング結果発表
  - ・総合
  - ・国公立・私立別
  - ・各部門別順位
3. 調査から分かったこと
  - ・自然エネルギー導入率
  - ・EMS、環境報告書について
  - ・学生への教育/連携体制
  - ・その他の温暖化対策実施状況
  - ・大学が抱える課題について

【発表のポイント】

- エコ大学ランキング参加大学数が昨年比で 1.5 倍に増加
- 調査内容は CO<sub>2</sub> 排出量・エネルギー使用量、廃棄物、教育分野など全 6 項目
- 自然エネルギーを利用している大学は 151 校中 77 校
- 太陽光発電 70 校、風力発電は 15 校、バイオマス発電は 2 校が導入
- 人感センサーや高効率照明器具は比較的多くの大学で導入している(それぞれ 8 割以上)
- 建物ごとのエネルギー使用量の公示、エレベーターの運用改善、自動ドアの運用改善などは実施している大学が少なかった(それぞれ 5 割以下)
- 省エネ対策の課題として、資金確保、学内の意識啓発・統一を挙げる大学が多かった。(6~8 割程度)
- 自然エネルギー導入の課題として、資金確保、機器の効率性を挙げる大学が多かった(5~9 割程度)
- 全体の約 3 分の 1 がなんらかの環境マネジメントシステムを導入(ISO=20 校、エコアクション 21=6 校、独自システム=21 校)
- 環境への取り組みについて学生との意見交換の場がある大学は 67 校
- 環境活動を行っている学生団体と連携している大学は 53 校



発表の様子(ランキングの解説)

### 2.2.2 三重大大学の環境に関する取り組み

第2回エコ大学ランキングで総合第1位となった三重大大学の朴教授にお越し頂き、当大学の環境対策に関する取り組みについて講演して頂いた。

#### 【発表者】

朴 恵淑 教授(三重大大学環境 ISO 担当/学長補佐)

#### 【発表内容】

1. 四日市公害と三重大大学
  - ・三重県は歴史的に四日市公害で有名な土地
  - ・三重県:公害県から環境先進県へ
2. ISO14001 認証取得
  - ・2006年初頭から取得を目指し、約2年をかけて2007年12月に取得
  - ・ISO活動の紹介
3. 3R活動/地域連携・社会貢献
4. 三重大ブランドの環境教育/アジア・太平洋大学環境コンソーシアム
5. カーボンフリー大学
  - ・2020年までに1990年比
  - ・CO<sub>2</sub>を30%削減
6. COP10 in 三重
  - ・ブースの設置
  - ・学習プログラムの企画運営
  - ・フォーラムの開催

#### 【講演のポイント】

- 一つのキャンパスにほとんどの学部が入って

- いるため、EMSをまとめて取得できた
- エコバッグをデザイン(使いやすいデザインに工夫。) → 全学生、教職員に配布。レジ袋のないコンビニの営業を実現
- 大学の特徴である学生に入れ替わりに対応して、自転車や家電などのリサイクルを徹底
- 2万4000トンのCO<sub>2</sub>を排出しているが、30%削減の目標を立てた
- 設備、内部削減、外部削減と3つに区分し、設備、学内の学生、卒業生や家庭の協力も得ている
- COP10関連では、アジア各国から200名の先生と学生を集めてワークショップを行った



三重大大学 朴教授

#### 【質問】

- Q. このような積極的な対策に踏み切る際に、イニシアティブを取った存在は誰か？何がきっかけだったのか？
- A. イニシアティブを取ったのは「時代」、学長そして学生。2005年に政府の改革で国立大学は法人化された。それまでは国立大学は人件費や設備費などに関して国から保障されていたが、法人化によって状況が変わった。三重大大学は医学部があるので比較的強いが、それでも地方の中規模大学なので経営は安泰ではない。特色がないとやっていけないと判断し、学長と相談して「環境」でやるということになった。大学として存続をかけて思い切った選択をする必要があったが当初は気持ちが中途半端だった。その時、学生が後押しをして全学的な流れになった。



Q. 太陽光や風力などの再生可能エネルギー設備に相当な費用がかかっていると思うが、どのようにしてそれらの資金をまかなっているのか？

A. 現在、大学の消費電力のうち 4%を自然エネルギーでまかなっている。ただし三重大学全体に省エネ設備を導入しようとするに 40～80 億円くらいかかるという見積もり。三重大学の年間の電気代は 4 億 4000 万円だが、その運用状況を徹底的に見直したことで約年間 400 万円を浮かすことができた。水道代も同様に 700 万円浮かせた。また、企業からの寄付も集めている。

### 2.2.3 日本工業大学の環境に関する取り組み

第 2 回エコ大学ランキングで私立大学部門第 1 位となった日本工業大学の成田教授に、当大学の環境に関する取り組みについて講演して頂いた。

#### 【発表者】

成田 健一 教授(日本工業大学)

#### 【発表内容】

1. 大学概要
2. 大学環境方針
3. キャンパスまるごとエコ・ミュージアム
4. キッズエコサミット 2010
5. 地域バイオマス循環システム
6. 太陽光発電システム・風力発電設備
7. 省エネルギー対策
8. キャンパスの緑化
9. 学生環境推進活動

#### 【講演のポイント】

- 2001 年に全学で ISO 取得
- 2008 年、ISO をきっかけに環境系の学科を 2 つ新設した。
- 食堂から出る 1 日 150kg の生ごみをコンポストによって処理し、100%堆肥として再資源化。キャンパス外への排出はゼロとしている。
- 10 年目を迎えた学生環境推進活動は、活動の一環として、学内外の清掃・環境講演・分煙活動などに取り組む。
- 教職員による委員会だけでの対策には、限界がある。多くの学生に環境に役立つ情報を発信して、協力が得られるような活動を行って

いきたい。

- 内部環境監査を学生も行っている



日本工業大学 成田教授

#### 【質問】

Q. このような積極的な対策に踏み切る際に、イニシアティブを取った存在は誰か？何がきっかけだったのか？

A. ずばり理事長。当校は小規模な大学なのでトップの意向を比較的反映させやすい。最初のきっかけは理事長のトップダウンだが、実際に対策を取る際には担当者などの教職員の方々が貢献し、その意志が学生まで伝わり全学的に良い流れとなっている。

Q. 太陽光や風力などの再生可能エネルギー設備に相当な費用がかかっていると思うが、どのようにしてそれらの資金をまかなっているのか？

A. 助成金を利用しているが、それだけでは足りない。導入した太陽光パネルは屋根と一体化されており、建物の耐震強度を高めている。耐震工事と兼ねることで一挙両得の施策として経費をまかなっている。風力については研究費などを投資。また、環境関連の優れた研究に対して保護者の方々などが組織する後援会が助成金制度を設けている。

### 2.2.4 イェール大における持続可能性に関する取り組みの特徴と成果

米国の NGO が作成している米国大学の環境対策実施に関する評価でトップレベルの評価を得ているイェール(Yale)大学から積極的に活動に取り

組む学生を招き、当大学の環境に関する取組みを紹介して頂いた。講演後に会場から多くの質問が飛び交い、海外の先進事例への関心の高さが伺えた。

<参考:<http://www.greenreportcard.org/>>

#### 【発表者】

James Murphy Jr. (ジミー) 氏  
(イエール大学都市環境学専攻 2 年)

#### 【発表内容】

1. 所属団体 STEP(The Student Taskforce for Environmental Partnership)の概要紹介
2. イエール大学における環境への取組み背景
3. STEP の設立経緯
4. STEP 組織体制と目的
5. 大学との協働
6. 活動成果
7. プロジェクト紹介



イエール大学 ジミー氏

#### 【講演のポイント】

- イエール大学では 1970 年からリサイクル活動を行っていて、1980 年に正式な学内組織として発足、1990 年に本格的な支局部門として組織された
- さらに市民の環境に対する意識が特に高まってきた 2004 年に大学の持続可能性を目的とした組織“STEP”が設立
- 「環境」に対する意識はイエール大学生として基本的なものだとし、それを普及させることを目指している
- STEP は 4 人のチームリーダーと 24 名のコー

ディネーターなどで組織されている

- ジミー氏はチームリーダーのうちの 1 人
- 活動は主に意識調査や啓発のためのキャンペーン活動実施、情報発信など
- 外部組織との連携・巻き込みの例として、運動部のチームと協働した試合前のゴミ回収を実施がある
- コミュニケーションの一環として、毎週ニュースレターを発行している
- 学内の学生に直接インタビューしたりして、顔が見える活動・コミュニケーションを意識的に図っている
- 大学の組織なので学内全体へのメーリングリストを広報手段として使用することができる
- 活動のひとつに、食品トレーを使用しないように呼びかけるキャンペーン活動がある。食品トレーを使用しないという署名を集めることを通じて、トレーの使用者が減らし、食べ残しを大幅に削減した(※トレー(お盆)を使用することで必要以上の食事を取ってしまうため)
- STEP の活動に取り組んでいる学生は、大学からアルバイトという形で報酬を得られるため活動自体も持続的である(※学生に対して大学が報酬を支払うことは米国では珍しいことではない)
- 大学と学生がそれぞれ上手く連携したことが STEP の成功要因だと考えている
- 大学との協働によるメリットとしては、大学が持つ多くのリソースを活用でき、学生も金銭的な支援を得られるので持続的に取り組めること
- 逆にデメリットとしては、実施するプロジェクトに制約があったり、掲示物にも承認が必要、また活動内容が生徒に対する啓発活動などに限定されている

#### 【会場からの主な質問と回答】

- Q. 科学的な活動だが、財政的にはどうしているのか？寄付などはあるのか？
- A. STEP は持続可能性室に属しているので、そこから財務面のサポートを受けている。資金面で不自由はない。学生が大学から報酬を受けることは、アメリカでは最近よくあること。費用としては、非常に安価なものである。学生への意識啓発には、メールやプレゼンテーション、参加型イベントなどを用いる。効果の測定に関しては、実際に学生たちを観察することを通して

行っているが、定量的でないのがそれが今後の課題点である。

Q. 大学と協力を作るきっかけとなったことは何？

A. いくつかの段階があった。1990年に独立した組織が立ち上がったことが転機。大学と学生が協働するきっかけ次のきっかけが2004年にSTEPが作られたもの。Sustainability全体を考えるとSTEPの理念。大学・学生の双方向でのやり取りの推進を決めたことなどが、次の転機になった。去年、大学に新しい部署ができたこともきっかけであった。最後の大きな出来事は、イェール大学における持続可能性戦略の策定。大学全体で持続可能性についてのコンセンサスが取れたことが大きく影響していると思う。

Q. トレー削減活動の一般学生へのインセンティブは？

A. 最初は不便になって難しいことであったが、実際にやってみるとそんなに難しいことではなかった。提供する食事の価格などでのインセンティブはないが、環境に関する利点や健康への利点を周知している。食べすぎも防げる。特に金銭的にインセンティブはないが、実際には普及しているし問題はない。

Q. トレー削減プロジェクトは、アメリカでは一般的な方法なのか？それともイェール大独自の活動なのか？

A. トレーの運動は他の大学にも広がっている。バイキング形式は、一定額で食べ放題なので、食事を提供する側にもメリットがある。大学内が主な活動場所なので、それ以外にはあまり広がっていない。イェール大学の場合、食堂の運営が別の会社であるので、経済性も重視している。

Q. 活動に協力するために学生がする「誓い(署名)」はウェブ上でのものか？

A. 第一世代は持続可能性室で作ったもの。今回のものは自分たちが改訂したもの。何を行うかは選択式になっている。リマインダーのような役割。環境に対しての活動をやろうと、いう意識を持ってもらうためのもの。

Q. 何人くらいが署名したのか？実際に署名した人が行動をしたは確認できるのか？これによるこは測定可能なのか？

A. 対象学生数は5000名。新入生の10パーセントがサインしてくれた。測定に関しては、私たちが難しいと感じている。トレーを使わない人が書いた人か、書かなかった人かは判断できないから。測定については課題だと考えている。

Q. 新入生にどのような働きかけを行ってサインしてもらっているのか？

A. 様々なイベントの実施。楽しそうにするため、あるイベントではアイスクリームを用意。イベント中にPCを置き、すぐに参加できるような状況にしている。

Q. データの取り方はどうしているのか？また、夜でも学生の作業時間が報酬として払われるというのはアメリカでは許されるのか？

A. 1ヶ月に二日間、二時間だけ決まった時間で測定している。支払いに関しては、タイムカードで申告している。一週間でどのくらい仕事を行うかも自分で申請していく。何をやったかも記載する。深夜などの作業時間は、管理者に内容を確認されることがある。



講演を熱心に聞き入る参加者





講演に関する質問をする参加者



パネルディスカッションの様子  
左から朴先生、佐藤先生、坂本さん、小出さん

### 2.3 第2部 <パネルディスカッション>

第2部では、講演では聞けなかったより詳しい内容や取組みへの想いを引き出すため、そして更なる活動の推進のために今後どのようなことが必要になるかについて意見を交わすためにパネルディスカッションを行った。三重大と日本工業大学、両校の教員と学生活動家の2名を交えて、学生の活動、そして大学との協働に向けて意見交換を行った。

#### 【テーマ】

「学生の気候変動対策、何が出来るか!？」

#### 【パネリスト】

- ・朴 恵淑 教授(三重大学 環境ISO担当/学長補佐)
- ・佐藤 杉弥 准教授(日本工業大学)
- ・坂本 卓司 (大阪大学大学院修士1年)
- ・小出 瑠 (早稲田大学3年)

#### 【コーディネーター】

上地 成就(CCC 実行委員会)



日本工業大学 佐藤先生

#### 【コーディネーターからの話題提供】

- 大学内には教員、職員、学生を中心とした様々な立場の構成員がいるが、その中で学生は何が出来るのか?何を求められているのか?
- 学生と意見交換する機会がある大学は 151 大学中 57 校
- 学生組織と連携している大学は同 53 校

#### <トピック1>

#### 教員、職員、学生、それぞれ構成員の強みと弱みは何か?

平野さん(三重大学 ISO 実行委員会委員長):

学内で活動する上では教職員の方々などの協力が必要になるが、学生でないと思いつかないような新しい視点やアイデアなどが学生の強みだと思う。

佐藤先生:

教員の強みは実はそんなにないかもしれない。学生の強みは教員などに利害関係を気にせずストレートに言えること。

長田さん(日工大学生環境推進委員会委員長):

学生は大学にお金を払っているので、要望を伝えることのできる立場にある。大学は学生の言うことは聞いてくれると思う。

坂本さん:

近頃大人しいと思われている学生が主体的に活動に取り組むと、先生方は嬉しいし、協力して下さる先生方もいらっしゃる。つまり学生が先生を動かせる。学生の弱みは、4~6



年程度で大学から出て行ってしまうこと。教員の強みは他大学とのつながりによって、他大学の情報を得られること。

小出さん：

大学の運営体制は特殊。教員が経営層を選び、そこが中心に判断する。学生には決定権はない。先生方は研究室などの単位で決定権があるので、研究の一環で設備を導入することなどは可能。また専門的な知識やネットワークがある。学生の強みは、多くの時間を使って動ける。仕事の傍らではできないような作業が学生ならできる。学生ならではの自由な視点というのは実際にあると思う。研究者の卵として学生が調査提案活動に取り組むことの意義もある。

### <トピック2>

**対策が進んでいる大学は学生との連携が上手い。連携が上手くいくための条件は？**

朴先生：

三重大学の場合も最初からうまくいっていただけではない。ISO 学生委員会の前進組織を結成する際、全学生に募集をしたが 7500 人いるにも関わらず 13 人しか応募がなかった。元からいた立ち上げメンバーを除くと 7 名程度のみ。後に学生に聞いたところ、学生から見て具体的な活動内容やメリットが見えてなかったなどが原因だと分かった。他に自分の好きなサークルに参加するなどの選択肢がある学生にとって、環境活動に参加するメリットが感じられなかったことが考えられる。そこで、学校のカリキュラムを変え、活動に参加すると単位を得られる仕組みを作った。今では 100～150 名がコンスタントに所属する組織に発展した。学生は活動に関する権限があると責任を持って主体的に取り組むようになるし、社会体験を通じて様々な経験を得られる。教職員は学生を信じて待つことが大切。

佐藤先生：

学生に対して活動の場を与えることが大切だと思う。それによって学生のやる気を上げる。ゼミや授業でそれを引き出す先生がいるはず。学生から見て、近くにそういう先生がいない場合は、小さなところから始める。どこかにそういう先生がいるはずなので、行動を起こすことで徐々に協力体制が構築されると思う。学

生が主体的に取り組めば、教員は嬉しい。学生から働きかけてみる価値がある。資金的なサポートも大学の役割。

### <トピック3>

**活動する学生が大学(教員、職員)に求めるものは何か**

坂本さん：

環境に限らず、多くの大学は学生の意見を聞く姿勢も仕組みもない。それは学生運動の歴史がもたらした後遺症のせいかもしれない。学生の意見をもっと聞いてほしい。

小出さん：

学生の強力なリーダーシップがない場合は、大学の悩み(課題)と学生のやりたいこと(ニーズ)がマッチしないと大きく進まないと思う。そのためにはまず、大学の経営層や担当者などが腹を割って悩みを公開し、広く意見を聞くことが重要だと思う。学生側も大学の悩みに合わせた提案をすることで受け入れやすくなると思う。

ジミーの発表にもあったが、海外ではキャンペーン活動が中心。一方で日本の学生環境活動は地道な取り組みが多い。日本の学生も多くの人を巻き込む大きな動きを起こして欲しい。

### 【会場からの感想】

学生が提案するためにはしっかりとした準備が必要。ちゃんと考えて準備すれば、教職員の方々も話を聞いてくれると思う。(男性:学生)



## 2.4 第3部 <ワークショップ>

第3部では、一般の参加者に大学への対策提

案を体験してもらおうワークショップと、希望者に応じてゲストスピーカーとの座談会を行った。

ワークショップでは、参加者が3グループ・各2チーム、計6チームに分かれて作業を行った。まず、各グループにモデルとなる架空の大学の調査票を配布し、参加者にその大学の環境対策実施状況を把握してもらった。なお、モデル大学は3種類で、私立国公立、規模、実施状況など条件が異なる。各チームはそれぞれの担当する大学の状況に合わせて対策案を考え、最後にグループ内で発表(提案)した。

### <ワークショップの手順>

- ① モデル大学の調査票を読み込み、現状の把握と課題を発見する
- ② 課題を解決するための対策案をグループごとに考案する
- ③ 実際に大学に提案することを想定して、ワークショップで考案された対策案を発表する



ワークショップの様子

### <成果>

当日は短い作業時間だったが、参加者の積極的な取り組みによって様々な提案が出された。以下に

一部抜粋する。

### 【提案例】

- 建物や研究室の電気使用量の見える化と、研究室単位などでの削減率ランキング化  
=>研究費の増減  
学内にも経済的なインセンティブを！
- 長期休暇中には自販機を止める、削減する  
無駄なインフラな上、大学にコストがかからない
- アンケートの実施  
学内協働体制構築の第一歩として、まず学生の側に大学の取り組みを周知する必要がある
- 環境系学部の巻き込み  
環境サークルとは既に提携済み。環境サークル以外の一般学生の中で、コアとなる学生をつくる
- 教員・職員・学生の体制作りの中となる学内会議の設立  
アンケートによって得た情報をもとに、学生から大学に意見発信。同時に教職員からも協力の呼び掛け
- 研究室ごとに、イニシアティブをとれる学生リーダーを任命し、研究室ベースの啓発推進  
大学職員よりもゼミ・研究室の教員、メンバーが学生に対してアプローチしやすい
- 留学生の多い大学なので、環境専門の留学生のノウハウを活かして海外での取り組みを導入する



大学に対して対策を提案することを想定したプレゼンテーションを行った

### 3. 参考資料

#### <参加者のアンケート回答から一部抜粋>

- 海外での活動や先生と生徒の関わり方について考える良い機会となり、有意義な時間となりました。(女性・大学1年生)
- 大学によって、環境に対して、色んな取り組みをしているのがよくわかりました。自分の大学でも、何か出来ることがあれば積極的にやっていこうと思いました。貴重なフォーラムをありがとうございました。(女性・大学1年生)
- とても有意義なものとなりました。エコ大学ランキングの他の大学の回答が何らかの形で見られたら、今後の私の活動にも生かせるのかなと思いました。本当にありがとうございました。(男性・大学2年生)
- 大学の環境対策担当者もこのイベントに関心があったが、予定が合わないとのことで参加できなかったようです。今後もこのようなイベントを開催して大学生・大学が情報を交換できるような場を創造してください。大学四年目ですが、学ぶことが多かったです。(男性・大学4年生)
- いろいろなお話が聞けて楽しかったです！自分たちにも大学側にも様々な働き掛けができるということが分かって刺激になりました！(女性・大学1年生)
- ワークショップの中で面白いアイデアがたくさん出ていたので、作業の成果発表を参加者全体で共有できたらもっとよいと思った。(女性・社会人)

作成:全国青年環境連盟(エコ・リーグ) Campus Climate Challenge 実行委員会

HP: <http://ccc.eco-2000.net/>

Mail: [ccc@eco-2000.net](mailto:ccc@eco-2000.net)

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 2-19 銀鈴会館 507

TEL : 03-5225-7206 FAX : 03-5225-7206